

## 第四節 霜月騒動・岩門合戦と豊前武士

### 一 霜月騒動

平頼綱が安達  
泰盛を滅ぼす

弘安八年（二二八五）十一月、霜月騒動といわれる事件が鎌倉で起こった。北条得宗家の家来平左衛門尉頼綱が、鎌倉殿の家来を代表する秋田城介（安達）陸奥守泰盛とその嫡男

宗景らと合戦して、彼らを滅ぼした。

この事件は、各地に波及して、安達泰盛に心を寄せた武士多数が滅ぼされた。その中には、幕府引付衆であつた大曾根宗長・同義泰・武藤景泰・越後国守護足利満氏らが出て、豪族五〇〇人ほどが討たれた。

この乱後、安達泰盛の縁者であつた評定衆の金沢顕時、宇都宮景綱、長井時秀らが幕閣から排除された。

この事件は執権北条時宗が三十四歳の若さで急死し、嫡子貞時が十四歳の若年で執権となつて間もないと  
きに起こつた実力者同士の衝突であつた。

このころ、安達泰盛は執権貞時の外戚として自信満々、弘安の改革を断行していた。すなわち、諸国の一の宮・国分寺を興行して、国衙と関係の深いこれら社寺を幕府・守護の支配下に置こうとしたり、鎮西の名主職を名地頭として承認して御家人を増加させ、異国警固番役を務めさせるなど、公家・武家ともに「徳

政」として彼の改革に期待した。

しかし、北条得宗家の代官として、河手・津料をとって、富強となり、借上かじあげ（高利貸）を行うようになっていた御内人みうちびと（得宗家の家来）にとつて、河手・津料を禁止し、鎮西神領興行令や所領無償回復令は好ましいものではなかった。

### 弘安の徳政と泰盛

また、安達泰盛は、鎌倉から博多に明石民部大夫行宗・長田左衛門尉教経・兵庫助三郎政行の三人を派遣し、大友兵庫頭頼泰・安達越前守盛宗・大宰少弐経資を合奉行とした（「特殊合議制訴訟機関」といわれる）。

鎮西の宗たる神領を回復させるべく、神領で売却または入質した土地を調査して、神社へ返還させ、社殿を修復し、神事を再興し、また名主職を安堵して御家人を創出し、地頭職闕所地を調査して、蒙古合戦恩賞の地の捻出ねんしゅつに当たらせた。

この合奉行の特徴は、左のように意図的に守護国を避けて管轄国の組み合わせを作り、政務の公平を期していることである。

大友頼泰 明石行宗

肥前・筑前・薩摩

安達盛宗 長田教経

豊後・豊前・日向

少弐経資 兵庫政行

肥後・筑後・大隅

ここにも、北条泰時や時頼の政治を再現しようとする安達泰盛の政治姿勢をうかがうことができる。